

信濃川のミズアオイ再発見

藤原治義・中野雅子

ミズアオイ *Monochoria korsakowii* Regel et Maack (ミズアオイ科) は、かつては水田雑草であり、水田地帯に普通にみられた植物である。しかし、今では極めて減少しており、環境庁のレッドリストで絶滅危惧Ⅱ類 (VU; 絶滅の危惧が増大している種) として指定されている。新潟県においては「新潟県植物分布図集第16集」(1995)に分布状況が整理されているが、1995年時点で、確認できる生育地は、福島潟・瓢湖・佐潟・上堰潟・二箇堤の5ヶ所のみと記録されている。

信濃川の植物相については、西山ら (1977-) により詳細な調査と整理が進められているが、その中でもミズアオイの記録はみられない。また、建設省信濃川工事事務所によって行われた「平成6年度 河川水辺の国勢調査 (植物)」(1995)においてもミズアオイの記録はない。このように、かつては豊富に産していたと思われる種ではあるが、最近約25年にわたって信濃川では記録されていなかった。

我々は平成11年(1999)に長岡市近郊の信濃川河川敷を調査した際、2ヶ所でミズアオイの生育を確認したので報告する。

今回確認されたミズアオイの生育地は、長岡市と三島郡越路町の境に位置する信濃川左岸河川敷と、越路橋下流左岸の2ヶ所である。生育地の環境はいずれも護岸工事終了後の河岸に堆積した土であり、比較的水位の変動を受けやすい箇所である。ミズアオイは、河川においては洪水などの攪乱に依存し、洪水でできた新たな裸地に先駆的に現れる種のようなものである。ミズアオイに限らず、近年減少が指摘されている水生植物には洪水などによって生じた裸地に生育するものが多いが、ここでも水流によって堆積した土に生育したもので、今以上に堆積が進むか、もしくはより大規模な洪水によって浸食されれば、その生育環境ごと無くなり、また見られなくなるものと思われる。

県内において、「分布図集」の産地以外で、我々が確認したミズアオイの産地は、小阿賀野川(1998新潟土木事務所により記録)、阿賀野川(1999石澤・藤塚により記録)の2ヶ所があるが、前者は信濃川同様、河川改修終了後の護岸前面に堆積した土であり、後者は河川の拡幅のため河川敷の土砂を採取した跡にできた湿地である。治水の発達によって大規模な洪水が起きないことは大変好ましいことであるが、攪乱に依存するミズアオイのような湿性植物の保全・保護を考えた場合、人為的な河川敷の攪乱などの要素が必要で

あることを強く示唆している。特に、計画的な土砂採取による裸地の形成はミズアオイの生育地の形成に有効であるものと思われる。

最近再び各地の河川で発見されているミズアオイは、とにかく自然破壊の代表のようにいわれる河川改修や土砂採取などの河川内工事が、自然保護活動と共存する道を示すものではないだろうか。(関エコロジーサイエンス)

参考文献

1. 西山邦夫・坪谷富男・荒井キミ (1977-79)「新潟県長岡市信濃川の河辺植物 第1報-第3報」長岡市立科学博物館研究報告 第12-14号、長岡市立科学博物館
※「信濃川の河辺植物」は西山らにより1980以降も10年以上にわたって報告されている。いずれも長岡市立科学博物館研究報告に載せられている。
2. 角野康朗 (1994)「日本水草図鑑」文一総合出版
3. 池上義信・石澤進編 (1995)「新潟県植物分布図集 第16集」、pp. 73-74、植物同好じねんじょ会
4. 建設省信濃川工事事務所 (1995)「河川水辺の国勢調査 平成6年度 信濃川水系 (信濃川) 植物調査報告書」
5. 石澤進・藤塚治義 (1999)「河川の洪水、改修などに伴う植生の動態」(河川整備基金助成事業報告書)



信濃側左岸 渋海川合流部付近 1999. 10. 5